

子どもと老人

：幼児教育における祖父母の役割

今野和夫（教育学部特殊教育研究室）

The Child and the Old

：The Role of Grandparents in Early Childhood Education

Kazuo Konno

1. はじめに

高度経済成長を引き金とする核家族の急激な進行（三世代家族の急減）⁽¹⁾によりもたらされた様々な問題のひとつとして、発達過程において老人、特に最も身近な存在たる祖父母と深く関わる経験を奪われた、いわば「老人を知らずに育つ子ども」の増加を指摘することができる⁽²⁾。一方、三世代家族内においても、家父長制度の崩壊、母親の就労意欲の高まり、乳幼児教育施設の不足、親子関係の密着化、子ども最優先の家庭運営等により、老人と親の関係はもちろん、老人（祖父母）と子ども（孫）の関係も大きな変容を遂げつつあると思われる。

ところで、60才以上の老人が全人口の約20%を占める本格的な高齢化社会の到来を眼前に控え、今日、いわゆる老人問題が盛んに論じられている⁽³⁾⁽⁴⁾。年収・居住水準・就業・家族関係・健康などの生活構造・生活問題に関すること、年金・社会保障・医療制度などの福祉施策に関すること、老人の心理・生き方・生きがいといった精神面に関すること、重い病気や障害ゆえにとりわけ弱い立場にある老人に対する処遇（看護・医療面を含めて）の在り方に関すること……老人問題の中味は実に多様であり、そのいずれもが、より深い検討と改善を早急に必要としている。

老人問題は、一般に「老人の側」の問題としてのみ捉えられがちである。あるいは、それに関する論議において、とかく老人は、他の若い世代から孤立し同時に若い世代からのより一層の同情と施しを乞うている存在と、見なされがちである。これらの傾向からもたらされるのは、老人の人権・人間性を無視し、老人問題を物質的・経済的援助のみによって対症療法的ないし表面的に解決しようとする姿勢である。老人問題に関して、筆者は、子どもを含むすべての世代が、その問題の真の解決に向けて一定の役割を担っていると考える。現代の子どもは未来の老人であるが、その前に、老人問題の解決にとり最も大きな役割を持つ成人期を通る。その時、彼らは、老人を社会的にどのような存在と考え、どのような価値観・人間観に基づいて老人に対処するのだろうか。こう考えると、子どもと老人とのパイプ役としての成人（親や教師）の責任は甚大である。そして、彼らが現在良きパイプ役となり得ているか、換言すると、彼ら自身が老人に対しどのような意識を持ち、どのような態度を示しているかといった点が、即刻問われるべき課題として浮かび上がる。老人に対する子どもの意識・態度の形成に重大な影響を及ぼすのは、老人に対す

る成人自身の意識・態度である。ちなみに、我が国では9月15日が敬老の日とされ、幼稚園や保育園でも様々な行事が行なわれるが、子どもを含む若い世代が老人を敬わなければならないのはなぜなのか、老人の何を本当に敬うべきなのか、子どもたちに老人についての理解を深めさせるにはどのような指導が必要なのかといった点が、どれほど考慮されているのだろうか。ともあれ、現代の成人にとっては、自らの老人観を厳しく見つめ直すことが不可欠な時期にあると思われる。

2. 目的および方法

老人との関わりを深める経験を持つことは子どもの発達にとり不可欠の見地より、子どもと老人との関係をめぐる我が国の今日の問題を明らかにし、かつ、子どもと老人との関わり望ましい姿について具体的に追求して行きたい。

その第一歩として、本研究では、社会における子どもと老人との関係の縮図とも言える家庭内での幼児と祖父母との関係に焦点を当て、現在彼らの間にどのような関係が展開されているか、彼らのパイプ役としての幼児の親が、子育てをめぐり祖父母とどのような関係にあるのかといった点に関し、実態的・多面的に検討したい。

表1の内容からなるアンケート調査用紙が3歳以上の就園児（平均年齢4.95歳。福井県内の

表1. アンケート調査項目

- | | |
|-------|---|
| 〔問1〕 | お子さんは、毎日の生活においておじいさんと一緒にいる時間が長すぎると感じますか。 |
| 〔問2〕 | 日頃おじいさんは、お子さんのためにどんなことをしてくれていますか。どんなささいなことでもかまいませんから、思いつくままにいくつでもお書きください。 |
| 〔問3〕 | あなたは、おじいさんが現在お子さんのためにしてくれていることに満足していますか。 |
| 〔問4〕 | あなたは、おじいさんがお子さんに接する時の態度に不満を感じることがありますか。 |
| 〔問5〕 | おじいさんは、お子さんに対するあなたの日頃の接し方に、満足しているでしょうか。 |
| 〔問6〕 | あなたは、お子さんを育てて行く上で、日頃何かとおじいさんから学ぶこと、教えてもらうことがありますか。 |
| 〔問7〕 | 〔問6〕で「大いにある」「ある」と答えた方のみおたずねします。おじいさんから学ぶこと、教えてもらうこととは、たとえばどんなことですか。思いつくままにいくつでもお書きください。 |
| 〔問8〕 | あなたは、日頃、お子さんのことでおじいさんに相談しますか。 |
| 〔問9〕 | 逆におじいさんの方から、日頃、お子さんのことであなたに相談しますか。 |
| 〔問10〕 | お子さんと接して下さっているおじいさんに、日頃感じていることや何か言いたいことがありましたら、いくつでもご自由にお書きください。 |
| 〔問21〕 | ご家庭には、お子さんのことやお子さんに対する接し方などについて、おとうさん・おかあさんとおじいさん・おばあさんが自由に遠慮なく話し合えるふん囲気がありますか。 |
| 〔問22〕 | ご家庭では、お子さんを育てて行く上で、おとうさん・おかあさんとおじいさん・おばあさんが協力しあっていると思いますか。 |
| 〔問23〕 | お子さんがおじいさんやおばあさんと一緒に過ごす時間は、一日（朝起きてから寝るまで）で大体どのくらいですか。 |
| 〔問24〕 | おじいさんやおばあさんと同居しているために「親子だけの時間がとりにくい」「子どもを親の思いどおりに育てにくい」……と感じることがありますか。 |
| 〔問25〕 | ご家庭におじいさんやおばあさんがいることは、お子さんの健全な発達・成長に良い影響をおよぼしていると思いますか。 |

〔注〕 問11～20はおばあさんに関するもので問1～10に対応。問2・7・10・12・17・20は自由記述、それ以外の問については選択肢がある。

3つの保育園，2つの幼稚園の協力を得た)を通して家庭に配布され，最終的に祖父母同居の母親158人，祖母のみ同居の母親91人からの回答が得られた。平均年齢は，祖父63.38歳，祖母60.79歳，父親34.45歳，母親31.35歳である。なお，この調査は，昭和54年2月に行なわれた⁽⁵⁾⁽⁶⁾。

3. 結果と考察

(i) 子どもと祖父母の関わり・子どもをめぐる親と祖父母の関わり of 諸相

まず図1には，子どもの発達への祖父母の影響を祖父母同居の親および祖母同居の親がどのように考えているか，記されている。ちなみに，祖母同居の親の回答は，祖母のみに対する評価ということになる。

図1. 子どもの発達への祖父母の影響 (問25) 単位%

	1.非常に 良い	2.良い	3.どちらかという と良い	4.どちらとも いえない	5.その他 (5.6.7)
祖父母同居親	9.0	28.2	34.0	19.8	9.0
祖母同居親	10.9	27.2	30.4	29.3	

2.2

子どもへの祖父母の影響に関し「非常に良い」「良い」「どちらかというと良い」といった肯定的な見方をする親が，全体の71%ほどを占めている。祖母同居の親の場合も68.5%である。これらの比率はかなり高いものと言えるが，祖父母同居親・祖母同居親いずれの場合も「どちらかというと良い」といったいわば「消極的肯定」が全体の30%程度を占める点には，留意すべきであろう。子どもに対する祖父母の日常の接し方について，親が若干なりとも疑問・注文を持っていると考えられる。さらに，祖母同居親の場合，「どちらともいえない」といった見方が30%近くある。祖父がいなくても一層祖母と子どもが密着してしまうこと，その結果に対する親の不安が示唆される。ちなみに，図2には祖父母と子どもと一緒に過ごす時間（1日につき）が記されている。その過ごし方は，両者の関わりが強いもの（一緒に本を見ながら話をする，プロレスごっこをするなど）から弱いもの（たとえば，子どもが公園で遊ぶ時，そばで祖父母が見守る）まで実に多様であろうが，祖父の死去に伴う祖母と子どもの接触時間の増加傾向が認められる。

図2. 祖父母と子どもと一緒に過ごす時間（1日につき） (問23)

	1.1時間 未満	2.約 1時間	3.約 2時間	4.約3時間	5.約4時間	6.約5時間	7.約6時間	8.約7時間	9.8時間 以上
祖父母同居親	5.7	7.0	14.6	13.3	14.6	18.9	12.0	11.4	
祖母同居親	4.3	9.8	10.9	25.0	14.1	14.1	18.5		

1.1 2.2

次に，図3に見るように，祖父母と同居しているために「親子だけの時間がとりにくい」「子どもを親の思いどおりに育てにくい」と「いつも」あるいは「時々」感じる親が，祖父母同居親の39.0%，祖母同居親の32.2%を占めている。一方，不満を「まったく感じない」とする親は祖父母同居親（29.6%）よりも祖母同居親（40.9%）に多い。また，子どものことで自由に話

し合える雰囲気は祖父母と自分の間にあるとする親は、祖父母同居親 59.6%，祖母同居親 68.4%である（図4）。さらに、子育てをめぐる祖父母と自分との協力状態を良好（「協力しあっている」「どちらかというと協力しあっている」とする親は、祖父母同居親の68.3%，祖母同居親の83.7%である（図5）。一家内に祖父と祖母、つまり老人が2人いることは、子ども観・教育観・価値観の相違により、老人世代と親世代の間に子育てをめぐり様々な食い違い・トラブルが生じる可能性を大きくすると考えられる。祖父母同居の親もその過半数が自分と祖父母との連携状態を肯定的に評価していると言えるが、その評価は、祖母同居の親のそれに比べれば「消極的」と言えよう。多少強引な推測をすれば、祖父のいない祖母は、自ら子どもや親の中に溶け込むよう、子どもや親から受け入れられるよう、祖父のいる祖母より一層の配慮・努力をしているのかもしれない。

図3. 祖父母との同居による親子接触上の不満（問24）

	1.いつも感じる	2.時々感じる	3.まれに感じる	4.まったく感じない
祖父母同居親	10.1	28.9	31.4	29.6
祖母同居親	3.2	29.0	26.9	40.9

図4. 祖父母と両親とが、子どものことで自由に話し合える雰囲気（問21）

	1.ある	2.ない	3.どちらともいえない
祖父母同居親	59.6	17.3	23.1
祖母同居親	68.4	12.6	19.0

図5. 子どもを育てていく上での、祖父母と両親との協力状態（問22）

	1.協力しあっている	2.どちらかというと協力しあっている	3.どちらともいえない	4.その他(4.5)
祖父母同居親	37.3	31.0	20.9	10.8
祖母同居親	42.4	41.3	13.0	3.3

(ii) 子どもと祖父ないし祖母の関わり・子どもをめぐる親と祖父ないし祖母の関わり
の諸相

ここでは、子や親との関わりにおける祖父と祖母との違いについても見て行きたい。まず、祖父母同居親は、祖父と子ども・祖母と子どもの接触時間について、かなり異なる見方をしている。図6に見るように、「短い」「どちらかという短い」が祖父について47.8%，祖母について21.4%となっている。「ちょうどよい」が祖父について41.5%，祖母について49.7%，「長い」「どちらかという長い」が祖父について7.6%，祖母について26.4%である。祖母同居親は、祖母について、祖父母同居親とほぼ同じ見方をしている。

次に、図7に見るように、祖父については65.4%，祖母については71.5%の祖父母同居親が祖父・祖母が子どもにしてくれていることに関し満足の見方（「満足」「どちらかという満足」）をしている。祖母同居親は、祖父母同居親に比べ、祖母についての曖昧な見方（「どちらともいえない」）が多くなっている。ところで、表2では、祖母が日頃子どもにしてくれている

図6. 祖父・祖母との接触時間について (問1, 11)

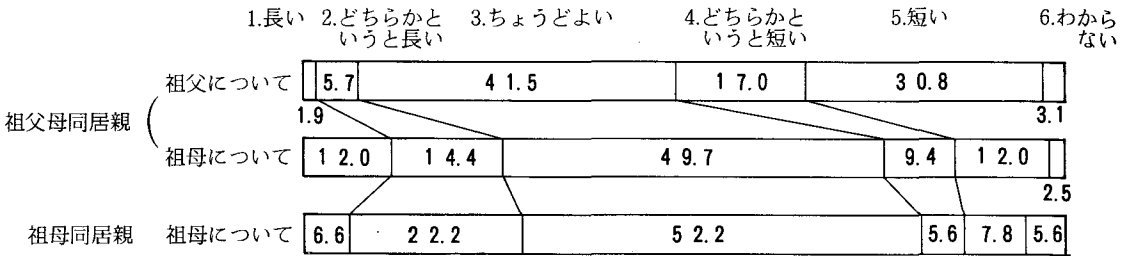
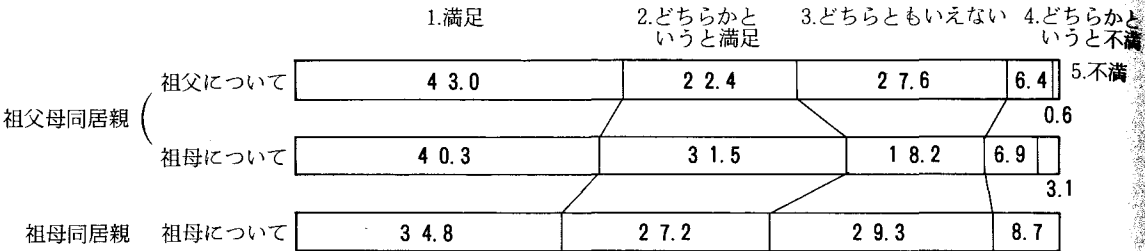


図7. 祖父・祖母が子どもにしてくれていることについて (問3, 13)



ことに関し祖父母同居および祖母のみ同居の母親達が記述したすべての項目について、分類が試みられている（祖父についての結果は省略するが、祖母とかなり類似した内容であり、おもちゃの修善・製作といった祖父独自の関わり方があまり認められなかった）。園への送り迎え、食事の世話、一緒に遊ぶ、本を読んでやる、一緒に入浴する、おやつをわたす、一緒に寝るなどが比較的多く記載された項目である。ともかく、子どもに対しての世話・サービスのないし母親代行的な項目が非常に多い。祖母の側での自制がなければ、子どもを取り巻く今日の過保護的状况にさらに拍車をかけることにもなりかねない危険性を孕んでいると思われる。一方、この質問に対する母親達の平均記載項目数は3.13（祖父に関しては2.6）と予想以上に少なく、子どもと祖母の日頃の具体的な関わりについて親達が意外と知らない（無関心？）ことが予想される。

次に、祖母同居親の祖母に対する複雑な意識が、図8からも示唆される。すなわち、子どもに対する祖母の態度について不満を感じる（「いつも」「時々」）親は、祖父母同居親の31.0%に対し、祖母同居親は40.8%と多い。既に紹介した図2・4・5からは、祖父のいない状況が祖母にとり子どもや親との関わりを深くする契機となりうることが示唆された。祖母との関わりが深くなるということは、親にとって、子育てをめぐる祖母への期待が何かと強まるということ、意味するのかもしれない。期待が強まるということは、それだけ祖母と子どもの関わりに関心でいられず、祖母への注文・不満も多くなるということである。祖父母同居親が示した祖父・祖母への不満度の違いにも、両者に対する親の期待度の違い（祖父への低い期待）が反映しているのではないだろうか。

一方、図9は、子どもに対する親の態度を祖父や祖母がどのように見ているか、親の立場から推測させた結果である。祖父が親の態度に満足の見方をしている（「満足しているだろう」「どちらかという満足しているだろう」と考える祖父母同居親は、50%に達しない。祖母についても同様である。特に、祖父について「わからない」とする親が30.2%あり、両者間の疎遠さが認められる。一方、子どもに対する親の態度について祖母が満足の見方をしていると考えるのは、祖父母同居親（43.9%）より祖母同居親（51.1%）に多い。祖父母同居親よりも祖

表 2. 子育てにおける祖母の日常的役割 (問12) (数字は頻数)

(A) 世話〔441〕

- a. 園に関すること：園への送り迎え (68). 身仕度など登園の準備 (19). 帰園時の着替えの手伝い (9). 保育参観等の園の行事への参加 (4). その他 (5) —おたよりばさみを見る etc —
- b. 食事に関すること：食事の準備・世話・後始末等 (67).
- c. 入浴に関すること：一緒に入浴する (47). 風呂上がりの世話 (2).
- d. 衣服に関すること：衣類の洗濯 (20). 衣服の着脱の援助 (17). 衣類の裁縫・つくろい (10).
- e. おやつに関すること：おやつをわたす (35). おやつを作る (9).
- f. 排泄・清潔・整理等に関すること：排泄の世話 (10). 便所へ連れて行く (6). 洗面介助 (7) 散髪をしてくれる (5). 散髪に連れて行く (1). ふとんの上げおろし (1). 子どもの靴をそろえる (1). 遊具の後片づけの援助 (2). ふとんを干す (1). 子ども部屋の片づけ (1). 持ち物に名前を書く (1). 鼻をかむ (1). つめを切ってやる (2).
- g. 睡眠に関すること：一緒に寝る (27). 朝の声かけ (1).
- h. 健康・安全に関すること：病院への付き添い (9). 病気の看病 (3). etc.
- i. その他 (「世話をみてくれる」等、漠然とした表現がなされているもの)
世話をみてくれる (16). 保育所から帰るとみてくれる (8). 身のまわりのことをしてくれる (7). 面倒をみてくれる (5). 細い所まで気をつけてくれる (3). 子守り (3). 母がわり (3). 何でもしてもらおう (1).

(B) 文化・教育〔241〕

- a. 遊びに関すること：一緒に遊ぶ (116). その中56項目では、カルタ取り、積み木遊び等具体的に遊び名が記されている。遊びに連れて行ってもらう (5).
- b. 本・お話しに関すること：本を読んでやる (50). 昔話などのお話しをしてやる (17). お話しの相手をしてやる (14).
- c. 教育に関すること：しつけに関し子どもに口を出す (10). 文字や数を教える (8). 礼儀作法を教える (3). 色々なことを教える (3). etc.

(C) 物やお金の付与〔52〕

おかしを買い与える (19). 衣類や身の回りの物を買う (12). 本を買ってやる (6). おもちゃを買ってやる (6). 何でも買い与える (4). おみやげを買う (3). お小づかいを与える (1). 貯金をしてやる (1).

(D) 外出〔35〕

デパート等買い物に連れて行く (17). 散歩 (8). etc.

(E) 愛情・保護〔11〕

おんぶやだっこをしてあげる (5). かわいがってくれる (3). 子どもが困っている時助けてくれる (1). 泣いている時だましてくれる (1). 叱られた時、かばってあげる (1).

図 8. 子どもに対する祖父・祖母の態度への不満 (問 4, 14)

		1.いつも感じる	2.時々感じる	3.まれに感じる	4.まったく感じない	
祖父母同居親	祖父について	2	4.1	4	3.0	
	祖母について	3.8	2	7.2	4	7.5
祖母同居親	祖母について	2.1	3	8.7	3	6.6
					2	2.6

母同居親の方が、祖母と深い関わりを持ちつつ自分の子育てに対する自信を養っている、と言えないだろうか。もちろん、祖母同居親の 28.2% が祖母の見方について「わからない」と答えている点も、見逃してはならないだろう。

図9. 子どもに対する親の態度への祖父・祖母の見方について (問5, 15)

		1.満足して いるだろう	2.どちらかという と満足しているだろう	3.どちらかという と不満だろう	4.不満 だろう	5.わからない
祖父母同居親	祖父について	1 1.9	3 3.3	2 0.8	3.8	3 0.2
	祖母について	9.0	3 4.9	2 9.0	8.4	1 8.7
祖母同居親	祖母について	8.7	4 2.4	1 7.4	3.3	2 8.2

次に、子どもを育てて行く上で親が祖父母から学ぶことは、決して少なくないと思われる。子どものケガに対する応急処置の仕方等について祖父母から直接教わることもあれば、子どもと接する祖父母の姿の中に日頃自分が失いがちな何か大切なもの（細やかさ、寛容さ、宗教を大切に
する心など）を見出し反省するということもあろう。だが、図10の結果は、親が、祖父や祖母を自分の子育てにとって重要な人物として必ずしも高く評価していないことを、示唆する。学ぶこと、教えてもらうことが「あまりない」「ぜんぜんない」とする親が、祖父に関して 54.1% 祖母に関して40%程度認められる。祖父や祖母から学ぶことが実際になのか、あるいは、学び教わる必要性を感じないのか。なお、表3では、子育て上祖母から学ぶこと・教えてもらうことが「大いにある」「ある」と回答した母親（祖父母同居親と祖母同居親）にその具体的な内容を記述してもらった結果について、分類が試みられている。まず何よりも、子どもに関わる祖母の姿を通して子どもに対する自己の養育態度に反省の目を向ける親が多いことが、注目される（気長さ、ゆとり、冷静さ、子どもの立場を思いやるなど）。また、子どもの健康管理という点で、祖母との同居が母親にとり非常な支えとなっていることが察知される。続いて、子どもの価値観・情操に関すること、子育ての知恵・方針に関することであり、昔の遊びやお話を親が祖母から直接教えてもらうことは少ない。

図10. 子どもを育てて行く上で祖父・祖母から学ぶこと (問6, 16)

		1.大い にある	2.ある	3.あまり ない	4.ぜん ぜん ない
祖父母同居親	祖父について	1 2.1	3 3.8	5 1.6	2.5
	祖母について	9.6	4 5.2	4 1.4	3.8
祖母同居親	祖母について	1 1.0	4 6.1	4 0.7	2.2

次に、親と祖父・祖母との相談機会について見よう。まず、子どものことでの親から祖父・祖母への相談機会に関し、特に祖父が母親にとって影響の薄い存在であることが明らかである（図11）。子どものことで祖父に「あまり相談しない」「相談しない」親が、祖父母同居親の 75.5% を占めている。祖母については、「よく相談する」「多いとはいえないが相談する」親が、祖父母同居親の 66%、祖母同居親の 67.4% を占めている。今後は、相談の内容についても、明らかにする必要があると思われる。一方、図12には、子どものことで逆に祖父や祖母の方から親に相談する機会の有無が記されている。祖父母同居親の場合、祖父の方から「あまり相談しない」

表3. 子育て上、母親が祖母から学ぶこと・教えてもらうこと（問17）

(A) 子どもへの接し方・取り組み方—子どもと関わる祖母の姿から学ぶ— [81]

叱ることより第一にほめてやる(2)。すぐ叱らずなだめて教える。きりとした態度で叱る。すぐカーッとならない。あまり叱らないこと。叱る時は叱りかわいがるときはかわいが(2)。大人の都合で子どもを叱ってはならない。叱る時も子どもの心にくみとるゆとりを持つこと。子どもを叱る前に親が見本を示すこと。子どもの自尊心を傷つけないようにほめながら叱ること。すぐ怒らず気長に子どもと接すること(2)。気長に接すること(6)。気長におだてたりなだめたりして自分からさせるようにする。子どもの着替えなどじっくり見ている口で言うだけで自分でさせる。ゆとりのある接し方(3)。子どもと同じようになって楽しみ楽しませるゆとりのある心をもって子どもに対すること。子への思いやりのある心。やさしく子どもに接すべきだということ(2)。ほがらかにニコニコ接してくれる。子どもの気持を理解すること(2)。子どもの身になって考えてやること。子どもの立場に立って物事を考え、子どもが納得いくように教えること(2)。あらゆる面において子どもと一緒に学んでゆかねばならないこと。細やかな心くばり(5)。子どもにベタベタした態度をとらない。育児に対するきびしさ(2)。マーケットなどでの子どもの欲求への対処の仕方。お手伝いをさせる心の引き出し方。明日必要なものは前の日から用意をさせる。自分たちの身の回りのかたづけをさせる。何でもいいからお手伝いをさせる。物を粗末に扱う子どもの心理のつかみ方、子どもの扱い方。子どもに対する熱意(2)。子どもに対する親のあり方。子どものしつけ方(17)。子どもに対する本の読み方(2)。子どもへの言葉づかい(3)。子どもの年令を考慮した玩具の与え方(2)。子どもとよくお話しをする。よく本を読んであげる。手作りの洋服を着せてやる。

(B) 子どもの健康 [48]

病気やケガの処置の仕方(45)。泣き方などからの子どもの健康状態のつかみ方(2)。健康面への細やかな心配り。

(C) 子どもの価値観・情操に関して [18]

(仏壇へのお参りなどを通して)宗教心の尊さを教えてくれる(8)。物を大切にすること(8) 人と人とのつながりを大切にすること(2)。

(D) 子育ての知恵・方針—祖母から母への直接的なアドバイス— [10]

昔からの子育ての知恵(親は子の鏡である、等)(8)。「家事よりも子どものことが大切」とのアドバイス。自分が食事中他の用をしてしまう時、「全部子どもに食べさせてしまってからしなさい」と言われる。

(E) 子どもの食事に関して [5]

子ども向けの味つけの仕方(2)。嫌いな食物の調理の仕方や子どもに合った食物の選び方(2)。

(F) 子どもの文化 [4]

昔のお話し。昔の遊び(2)。勉強のこと。

(G) その他 [6]

ささいなことでもためになる。教えられることで一杯(2)。1から10まで習うことばかり。封建的な教え方に感じるが子どもにプラスになっていることが多い…封建的な考え方は私達にも必要だと思う。自然の営みについてお話をしてもらったり見せてもらったりしている様子が若い者では気づかない様々なことを教えられ学ぶ意欲を与えられる。

「相談しない」との回答が80.4%ある。祖母については、「よく相談する」「多いとはいえないが相談する」が55.4%である。祖母同居親は、「よく相談する」「多いとはいえないが相談する」と「あまり相談しない」「相談しない」とが半々である。ともかく、少なくとも親の目から見た限り、子どものことで自分達が祖母に相談する機会は、祖母の方から自分に相談する機会よりも多いことになる。

図11 子どものことでの祖父・祖母への相談機会について (問8, 18)

		1.よく相談する	2.多いとはいえ ないが相談する	3.あまり相談しない	4.相談しない
祖父母同居親	祖父について	2 1.4	3.1	5 1.6	2 3.9
	祖母について	2 1.4	4 4.6	2 7.7	6 3
祖母同居親	祖母について	1 7.4	5 0.0	2 6.1	6 5

図12. 子どものことでの、祖父・祖母から親への相談機会について (問9, 19)

		1.よく相談する	2.多いとはいえ ないが相談する	3.あまり相談しない	4.相談しない
祖父母同居親	祖父について	1 6.4	3.2	4 5.6	3 4.8
	祖母について	1 3.2	4 2.2	3 3.3	1 1.3
祖母同居親	祖母について	1 4.0	3 5.5	4 0.8	9 7

最後に、問20（「お子さんと接して下さっているおばあさんに、日頃感じていることや何か言いたいことがありましたら、いくつでも自由にお書きください」）に対する祖父母同居親・祖母同居親の記述を、取りまとめて見ることにする（祖父に関しては少数の記述しか得られなかったので、省略したい）。

まず152名の回答者は、大きく、不満型（1ないし複数の不満事項を記述71名）、注文型（「～してほしい」という表現で、祖母に対して自己の不満の具体的な解決を訴える。42名）、不満と注文の混合型（10名）、感謝型（「ほんとうにありがとうと言うだけです」「よく世話をしてくれて感謝している」。15名）などに分けられる。不満の内容は表4のように分類可能であるが、注文の内容もほぼ同じ構成・順位である。

表4に見るように、子どもに対する祖母の過保護的態度や干渉的・抑圧的態度に関する不満が非常に多く、その中味も実に多様である。他に、子どもへの比較的・差別的態度、感情的態度、無関心・拒否的態度、子どもへの言葉づかい、祖母と自分との育児方針の不一致などに関する不満が、それぞれ少数であるが認められる。ともかく、この質問への回答においては、祖母に対する母親の心情がかなりストレートに吐露されていると考えられる。換言するなら、母親による子育てと祖母による子育て（孫育て）との間にかなりの摩擦がある、ということである。今後は、母親に対する祖母の心情も把握する必要がある。

以下、祖母に対する母親の意識をより具体的に捉えることを可能にする手がかりとして、問20に対する4人の母親の記述を、そのままの形で記したい。

母親A「おばあさん、もう少し静かにおじいさんのように子供を見つめていて下さると、何も言うことないのですが、それも性格ならば仕方ないですね。先生がおっしゃっていられるようにあんまり手をかけずにもっとほっておいて下さい。女としてはなかなかむずかしいけど私も努力します。おじいさんと同じく長生きして、いつまでも元気で仲良く暮らしていきましょう。」

母親B「私自身が『おばあちゃんは孫には無条件に従うもの』という既成概念からぬけ出られないため、自分の生活・自分の立場をちゃんというおばあちゃんに少し不満を感じる時もあるけ

表 4. 子どもに関わる祖母に対しての母親の不満 (問 20)

(A) 子どもへの過保護的態度 [68]

- a. 甘やかし：甘やかしすぎる (17)。甘すぎる (4)。甘い (9)。いい習慣・しつけを身につけたいと親も子もつらいながらも頑張っている時、ただかわいそうだからという理由で子どものしたいことを許したり与えたりされると、結果的には子どもを甘やかすことになる。祖母は毎日が単に子守という感じで子どもに接している…親としては毎日子守の中に何か教えてもらうことを期待する…祖母の子守は孫の子守という点で甘えがあるように思う。
- b. 手のかけすぎ・保護：手をかけすぎる (5)。子どもの世話を必要以上にするので自立心が自然につかないような気がする。服の着脱の際すぐ手伝ってしまう。遊びの片づけをさっさとしてしまう。すぐにおんぶ・だっこをする。危ないとすぐに注意してやめさせる。厚着をさせる (4)。
- c. 言いなり：子どもに使われている様子がある。教えるというより子どもの言いなりになる (2)。何でも言えばしてもらえると、という気持が子どもにある。何でも子どもの言うことをきいてやる (3)。子どものほしいものは何でも買ってくれる (2)。子どもがカゼをひいている時でも、子どもが出たがるからといって子どもと一緒に外へ出て行く。ほしがかるからといってすぐ甘い物をやる (3)。食事の好き嫌いを許してしまう (2)。
- d. 甘い叱り方：すぐ物を与えて言うことをきかせようとする。悪いことをしても叱らずにむしろほめるようなことをいう。悪いことをしても叱らず「よい、よい」と言う。
- f. その他：物を与えすぎる (2)。子どもは一日一日大きくなっていくのに、いつまでも赤ちゃんの時と同じ考えて世話をしている。自分の孫を「良い目」で見すぎ子どもを調子にのせる。

(B) 子どもへの干渉・抑圧的態度 [20]

口数、口出しが多い、口うるさい、口やかましい等 (13)。子どもが行動しようということに対して口うるさく注意され行動力が鈍る。子どもがしようとしていることに対して「あれもいけない」「これもいけない」「あぶない」とこまごま言いつすぎる。子どもが考えている時に「早くせ」とか「遅いよ」とか「アホ」とか言って、子どもの心を傷つける。子どもの絵や字のおけいこをそばでけなしたりする。おもちゃを散らかすと「散らかしてはダメ」、障子を破ると「ダメ」と目先のこまかいことばかりにとらわれがち。いたずらなどに対する寛大さが足りない。のびのびした子どもらしい子どもが育たないよって、祖母に言いたい。

(C) 子どもへの比較的・差別的態度 [7]

兄弟を公平にかわいがらない (2)。男の子、女の子の区別がきつすぎる。下に弟がいるのでいつも「お姉ちゃんだから」「お姉ちゃんでしょう」と言う。「よその子はこうしている」「よその子はできるのに」と、よその子と状態・優劣を比較する (3)。

(D) 子どもへの感情的態度 [6]

その時の気嫌次第で子どもに当たったり甘やかしたりする (3)。怒らなくともいい時に怒ったりする (2)。その時の気分次第で保育園に連れていったり行かなかったりする。

(E) 子どもへの言葉づかい [6]

言葉づかいがあらう、汚ない (5)。古くさい言葉づかい。

(F) 子どもへの無関心・拒否的態度 [5]

子どもと一緒に遊んでくれない。子どもが要求すると知らん顔をしていたり、「お母さんにしてもらえ」と言って何もしてくれない。子どもにはただきびしく叱るばかりで、あまり祖母としての愛情がないようにみられる。子どもとの対話の中に愛情が感じられない。愛やいたわりのない接し方は子どもの方でも敏感に受けとるので、もう少し子どもの気持をくんでくれたらと思う。

(G) 祖母と親との不一致・その他の不満 [13]

祖母と親とは子どもの将来性についての考え方が全く食い違ふことに不満がある。相談しない独善的な所がある。年をとっているせいか古い考え方があり。反対の意見を出すので困る時がある。子どもを叱る時自分で叱らない、「お母さんに叱られるよ」とか「お父さんに外へ出してもらおうよ」とか言う (2)。親が子どもを叱ったりすると、親がいけなかったようにしてなぐさめる。etc.

れど、後になって考えてみれば、子どもにも家族の一員としての役割や相互の立場を教えているためだと思ふことが、たびたびある。私一人で子どもを育てていたらもっと盲目的になっていただろうと思つて、おばあちゃんがいてくれることに感謝している。」

母親C「孫はかわいいとよく言われますが、その通りのようです。ただ責任のないかわいがり方なので、子どもを甘やかす結果をもたらす。例えば、いい習慣・しつけを身につけたいと親も子どももつらいながらがんばっている時、ただかわいそうだからという理由で、子どものしたいことを許したり与えたりされると、結果的には子どもを甘やかすこととなります。でも親に叱られた時、淋しい時のなぐさめの場所を与えられたり励まされたりする。子どもにとってもよき逃げ場所となっている。そして何よりも、おばあちゃんは子どもにとって心豊かにしてくれる存在です。」

母親D「子どもを甘やかすすぎる、子どもと一緒に遊んでくれない。体力的に子どもについていけないのか、バカバカしくてやってられないのか、口出しが多い。まず『危ない!』一日に何度言うか数えきれない。友達同志遊んでいる中へ話しかける。友達がいる時は、子どもにとっておばあちゃんはいらない。子どもを叱る時、自分で叱らない(お母さんに叱られるよとか、お父さんにお外へ出してもらうよとか)。家庭の事情で親が子どもを見てやれない。おばあちゃんも毎日大変なことだと思ふけれども、おばあちゃんが必要な時はしばらくの間だから、もうしばらくがんばってもらいたい。」

母親A・B・Cは、子どもに対する祖母の接し方に若干の不満を感じながらも、基本的に祖母の立場を理解し、かつ思いやり、あるいは、不満を抱く自分自身に反省の目を向けている。そして、自分の子育てや子ども自身の人格形成にとっての祖母の意義を、的確に理解している。一方母親Dと祖母との間には、日頃かなりの衝突があることが推測される。祖母の側の問題も無視できないが、この母親は、自分に代わる世話役としての機能を祖母に要求するだけで、子どもにとっての祖母のより本質的な意義を見失ってしまっている。子どもが成長し大人の世話を必要としなくなれば、あるいは、自分が仕事をやめさえすれば、子どもにとって祖母は必要でなくなるといった、いわば「使い捨て」的な意識⁽⁷⁾がこの母親に認められる。

4. 結 語

本研究では、今後長期的展望の下で、子どもと老人との関係をめぐる我が国の問題を明らかにし、同時に両者の関係の望ましい姿について具体的に追求して行くための第一歩として、家庭内での幼児と祖父母との関係および子どもをめぐる親と祖父母との関係が、母親に対するアンケート調査により実態的・多面的に検討された。その主な結果は、以下のように要約できる。

- (1) 母親は、子どもに対する祖父母の影響、子育てをめぐると自分と祖父母との関係について、概ね肯定的な意識を抱いている。
- (2) 一方、意識の上では子育てをめぐり祖父母と連携的な関係があるとする反面、現実的・具体的な日常の関わりについてみると、子育てに関し、母親と祖父・祖母との間に、互いに相談し合い学び合う姿勢・機会が不足していると考えられる側面が認められる。
- (3) 祖母が日頃子どもにしてくれていることとしては、世話的なものが多い。
- (4) 母親は、祖父や祖母が日頃子どもにどんなことをしてくれているか、意外と知らない。それでも、祖父や祖母が子どもにしてくれていることに、満足的な見方をしている。
- (5) 子育てをめぐると母親と祖父の関係は、非常に弱い。
- (6) 祖父がいるかないかにより、子どもや母親に対する祖母の関与の仕方が異なる。つまり

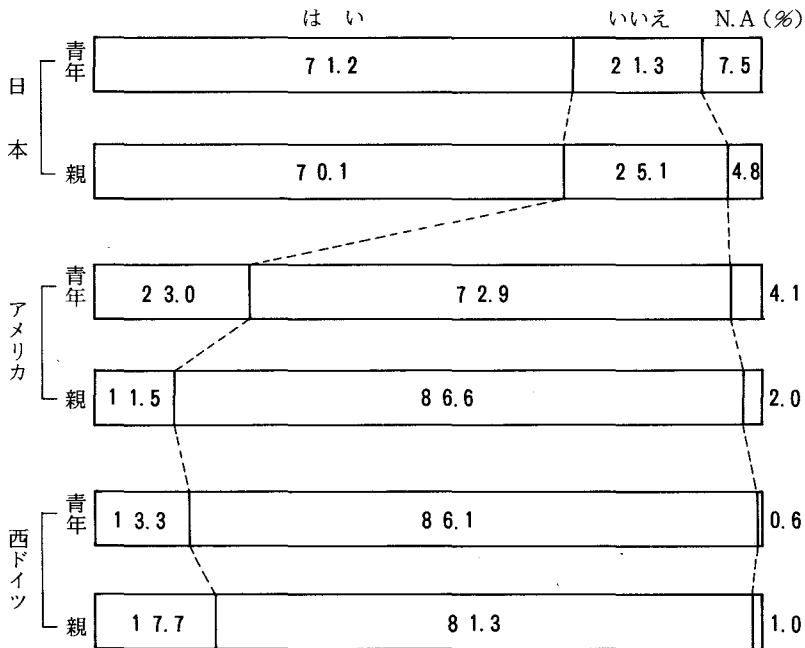
祖父がいない場合、子どもと過ごす時間が増える。子育てにおける祖母の負担の増加、母親との関係の深まりが、祖母に対する母親の不満を若干増大させる。

(7) 子どもに対する祖母の関わり方に、不満・注文を抱く母親が多い。その内容としては、子どもへの祖母の過保護的態度や干渉的・抑圧的態度に関するものが多い。

以上の結果については、子どもの年令・性・幼児教育施設（幼稚園児か保育園児か）、祖父母の健康状態・就労の有無・年令、母親の就労の有無、母親と祖母との血縁の関係（祖母にとって母親が嫁である場合と娘である場合）、地域差など本研究において考慮できなかった種々の変数との関連で、今後さらに検討を深めて行きたいと思う。

高度経済成長に伴ない急激に進行した核家族化の波も頂点を通り越した感のある今日、再び祖父母同居の三世代家族のメリットを見直そうとする動きが高まりつつある。ひとつ興味深いことは、図13に見るように、核家族化がまだ急激に進行しつつある時でさえ、日本の青年とその親が諸外国の青年と親に比べはるかに高いパーセンテージで、互いに将来の同居を望ましいと考えていたことである。日本人の中には、第二次世界大戦前の封建的な三世代家族を支えてきた「同居するなら息子夫婦と」といった直系家族志向性ならびに「子は年老いた親の面倒をみるのは当然」といった扶養義務意識が、根強く受け継がれているのであろう⁽⁸⁾。

図13. 親が年となった場合、子供と同居する方がよいと思いますか。



資料：総理府青少年対策本部「社会規範調査」（昭和49年）

だが、今日の祖父母と若い世代の歩み寄り傾向をもたらしている原因を、戦前の我が国独自の家族制度の下で培われた直系家族志向性・扶養義務意識のみに帰せることはできない。すなわち医療面での著しい進歩を一因とする老年期の拡大⁽⁹⁾によるところの老い先に向けての健康上の不安の増大、近隣社会や親族からの孤立、年金制度・老人福祉施策の立ち遅れによる老年期の自立的な生活の困難性といった老人の側の今日的諸問題、物価上昇・子どもの養育費の増大などによる家庭経済の悪化、既婚婦人の就労の一般化、保育所の不足といった若い世代の側の今日的諸問

題……これらの諸問題の合理的解決の一方向性として、三世代家族が見直されていると言えよう。

三世代家族のメリットの見直し・増加は、子どもにとっての祖父母の意義を改めて問い直して行くための契機となるはずである。だが、その見直しや増加が、今後、上述したような大人の側の諸事情だけを軸として展開されるならば、子どもと祖父母（老人）との関係も、子どもをめぐる祖父母と親の関係も、ともに希薄化・歪曲化の道を進む可能性がある。子どもにとっての老人（祖父母）の意義を追求し、その意義を子どもが発達過程において十分吸収できるような機会を家庭および社会の中に築き上げて行く努力⁽¹⁰⁾が、今こそ不可欠と思われる。もちろん、このような努力は、親と老人との連携の下でなされるべきである。以下、家族や社会の中で老人（祖父母を含む）と出会いかつ関係を深める経験を持つことによって子どもの側にもたらされるメリット——子どもの人格形成における老人の意義——をいくつか提起して、本稿を終えたい。

①社会の中に老人がいること、老人と共に生活することを、ごく自然のこととして受け入れる心の形成。障害を持つ仲間と関わる機会を与えられずに育つ子どもが、健常者優先の今日の世界に対し矛盾を感じにくい大人になりがちのように、老人と関わる機会を与えられずに育つ子どもは、老人が社会から弾き出されている状況に矛盾を感じない大人になるだろう。あるいは、老人と関わる場合、不自然さ・不快感のみが先行してしまうだろう。

②老人の姿に自分の遠い未来を予測し、自分の現在に老人の過去を見出す……現在の自分および老人を、人間の一生（人生）という長い発達の道筋の中に位置づけて捉えることができる。樋口⁽¹¹⁾は、次のように述べている。

「子どもと老人は絶対に切り離してはならない、というのが大前提である。人生を十分に生きやがてその生命を次の世代にバトンタッチしていく老人と、人生の入り口に立った幼な子とが触れ合い、人間の年輪というものを子どもたちに教えていくこと、それは人間の教育で落としてはならないことだと私は思う。人間の出生から老いと死に至る一生のライフサイクルに子どもが直かに触れながら育つということは、人生と人間を理解する上での必須課題である」

（樋口恵子 「育児は育自・教育は共育」 明治図書、P72, 1981）

③自分に愛情を注いでくれた老人の病気そして死……人間の運命の厳しい現実の理解。一方、その悲しみを乗り越え新しい生活の営みを築き直そうとする強さが人間たち（自分も含めて）にはあることを、老人の死後の家族との関わりの中で理解できる。

④老人に対する思いやり・いたわり・愛情、およびそれらを表現するための技術を形成・深化できる。

⑤老人から昔話、昔の遊び、童歌、玩具、生活の知恵などを伝承してもらうことにより、自己の知識・経験を豊富にできる。

⑥やさしさ、物を大切に作る心、情緒的な安定、ゆとり、宗教を大切に作る心、物を自分で作る喜び……情緒・情操を豊かにしうる。

⑦老人から過去の出来事や先祖のことを学べると同時に、現在の自分や社会を歴史的視野で捉える力を習得できる。

⑧嫁・姑の関係、婿養子、孫としての立場など、複雑な人間関係を理解できる。

(注)

- (1) 昭和29年から同51年の間に、核家族世帯は約800万世帯から2,000万世帯に増え、逆に老人世代を含む三世帯世帯は約770万世帯から550万世帯へと急減している。
- (2) 我が国より核家族が一般化している欧米（アメリカ、イギリス、フランス、デンマークなど）においては、老人世代（祖父母）と若い世代（親子）が比較的近距离に住み、頻繁に交流することが可能であるため、子どもの発達の過程において老人と関わる機会が継続的に保たれている。我が国の核家族化は、高度経済成長による若い世代の地方から大都市への移動・集中を主因とし、老人世代との疎遠化を必然的にもたらしている。
- (3) ジュリスト増刊総合特集「高齢化社会と老人問題」 有斐閣、1978年。
- (4) 森幹郎 「老人問題とは何か」 ミネルヴァ書房、1978年。
- (5) 今野和夫 三和優 「幼児教育における祖父母の役割 — その1. 子どもをめぐる祖父母と親の関わりの諸相 —」 日本保育学会第32回大会研究論文集、P 304～305、1979年。
- (6) 今野和夫 「幼児教育における祖父母の役割 — その3. 子育てにおける祖母の役割、祖母に対する母親の意識 —」 日本保育学会第34回大会研究論文集、P 326～327、1981年。
- (7) このような意識は、程度の差はあれ、我々の中にもあるように思われる。ちなみに、現代の女子青年（短大生）の半数程度は結婚後祖父母と同居することを望み、その理由として、やがて生まれる子どもよりも自分自身にとっての祖父母のプラス面（祖父母に子どもの世話をたのむことで自分は働ける、外出できる）がかなり強調されていることが、本研究に前後して行なわれた筆者の一調査で明らかにされている。（今野和夫「幼児教育における祖父母の役割 — その2. 祖父母との同居・子どもに対する祖父母の影響等に関する女子青年の意識 —」 日本保育学会第33回大会研究論文集、P 508～509、1980年。
- (8) 経済企画庁国民生活局編 「日本の家庭：わが国の家庭の現状と今後の課題」 大蔵省印刷局、1980年。
- (9) 老年（人）期は、大きく、60歳代の初老期、70歳代の中老期、80歳代以上の高老期に三分できる。医療の進歩に伴う平均寿命の延長により、近年は、中老期から高老期まで生きるのが当然となりつつある。このことは、様々な健康上の問題を抱えた老人の増加に結びついている。
- (10) たとえば、核家族世帯が大半を占める地域内にある幼稚園では、子どもたちに対し、遊びや製作食事といった活動を共にしつつ老人と継続的・発達の関わって行ける機会を与える試みが、必要と思われる。
- (11) 樋口恵子 「育児は育自・教育は共育」 明治図書、1981年。